

学・会・近・況

日本語テーマ別セッション III

# 日本における南アジア諸言語研究の現在

萬宮健策、今村泰也、  
吉岡 乾、パルデシ・プラシャント

## 1 セッションの目的

南アジアは言語のるつぼと呼ばれるほど、多くの言語が話されている地域である。インドを例にすると、話者人口が100万人を越える言語だけでも29を数える（2001年インド国勢調査）。日本での南アジア諸言語研究に目を向けると、ヒンドスターニー語と呼ばれていた時代から始まり日本での教育・研究歴が100年を越えるヒンディー語、ウルドゥー語にしても、言語学的な観点からの研究には、まだ多くのなすべきことが残されていると言えよう。

本セッション企画の目的は、言語を扱う研究は地域理解の基本であるという考えのもと、それぞれの発表者が、言語そのものを研究対象としている立場から日本の南アジア諸言語研究の一端を報告し、あるいは南アジアでの日本語研究の状況を振り返ることにある。

以下、セッションでの発表順にその概要を挙げる。

## 2 マラーティー語における行為の結果の否定可能性について

—日本語との対照を通じて—

今村泰也、パルデシ・プラシャント<sup>1</sup>

本発表では他動詞が含意する完結性についてマラーティー語と日本語の対照を行う。

池上嘉彦は日本語と英語の動詞を対照し、行為の結果の含意を否定で

きるか否かを調べた。例えばkill「殺す」—die「死ぬ」の場合、両言語とも容認されない(ENG: \*John killed Mary, but Mary didn't die; JPN: \*ジョンはメアリーを殺したけれども、メアリーは死ななかった)。ところが、burn (tr)「燃やす」—burn (intr)「燃える」の場合、容認性に違いが見られる(ENG: \*I burned it, but it did not burn; JPN: 燃やしたけれど、燃えなかった)。

宮島(1985)はこのような文について大規模なアンケート調査(300人)を行い、結果性(完結性)の強い動詞(例:殺す、落とす、こわす)から弱い動詞(例:冷やす、乾かす、燃やす)まで結果の含意(の否定の容認性)に差があることを示した(例えば、「柿の実を落としたけれど、落ちなかった」は容認しにくい、「スイカを冷やしたけれど、冷えなかった」は容認しやすい)。

南アジアの言語に目を転じると、ヒンディー語の複合動詞は結果の含意を否定できないという研究があるが(例:kaarD DhūRh liyaa (\*lekin milaa nahī)「カードを見つけたが、見つからなかった」)、管見の限り、単純動

詞の結果の含意を否定できるか否かに関する体系的な研究はない。筆者(今村、パルデシ)らはマラーティー語母語話者51人を対象にアンケート調査を行った。この調査では、調査協力者(22歳~82歳)に対し、「燃やしたけれど、燃えなかった」のような他動詞・自動詞のペアを含む51の文を示し、その容認性を5段階で判断してもらった。その結果、以下のことが明らかになった。

(i) マラーティー語においても動詞(行為)の結果の含意(の否定の容認性)について差が見られた(maarNe「殺す」、phoDNe「(コップを)割る」などは最も否定しにくく、phon laavNe「電話をかける」、shodhNe「探す」などは最も否定しやすい)。

(ii) 容認性には文脈や目的語(有生/無生の違いも関与)、他動詞が含意する完結性が重要な役割を果たしている。完結性の強い動詞(完結動詞)は弱い動詞(非完結動詞)よりも含意する結果の含意を否定しにくい。

(iii) 完結性は言語によって違いが見られる(例:wake (tr) vs. 起こす)。マラーティー語のuThavNe「起こす」は英語より日本語に近い。

(iv) 日本語とマラーティー語で完結性が異なる動詞も見られた(例:

vaaLavNe「乾かす」は結果の含意を否定しにくく、気候の違いが完結性に反映している可能性がある)。

### 3 言語アイデンティティの実際

#### —スィンディー語の事例から—

萬宮健策

本発表の目的は、南アジア地域で話されている新期インド・アーリヤ諸語 (New Indo Aryan Languages) の1つであるスィンディー語を事例として、南アジア地域における言語アイデンティティをめぐる人々の考え方の変化の一端を紹介し、南アジアにおける社会的、経済的言語格差について考えることにある。

パキスタンでは、憲法で国語がウルドゥー語と規定されているほか、各州はそれぞれ州公用語を規定している。スィンド州を除く3州では州公用語もウルドゥー語であるが、スィンド州のみウルドゥー語とスィンディー語の2言語が州公用語の地位を得ている。このことを反映してか、スィンド州内では、スィンディー語日刊紙、週刊紙 (すべてアラビア文字による) が数多く発刊されており、ウルドゥー語紙とならんでよく読まれている。また、衛星テレビ放送も少なくとも3局が24時間放送を実施しており、こちらはパキスタンに留まらずインドでも視聴されている。

スィンディー語が州公用語の地位を得たことは、1960年代以降南アジア各地で高まった民族運動と深く関係している。パキスタンでは、ムハージル (ウルドゥー語を母語とするインドからのムスリム避難民) のスィンド州への流入により、スィンド人との対立が目立つようになった。スィンド人はムハージルに対するパキスタン政府の対応に反発し、「言語紛争」を経て州公用語の地位を勝ち取ったのである。

他方、インドのスィンディー語は、1947年の分離独立時にパキスタンから移住してきたヒンドゥー教徒とその子どもたちの言語である。言語州を形成していないこともあり、スィンド人は国内各地に分散して住んでいる。どの州、地域でもスィンディー語は公的地位を得ておらず、家庭内言語に留まっている。インド政府はスィンド人の言語環境を考慮してデーヴァナーガリー文字によるスィンディー語表記を推奨しているが、

若年層は関心を示さず、英語やヒンディー語へと流れる傾向にある。スインディー語を話すこと、書くことにこだわっているのは、移住してきた世代に限られる。

1967年の第21次憲法改正で、スインディー語がようやくインド憲法第8附則に含まれたことから、連邦レベルでの言語普及促進活動が行われているものの、活動の中心となるべき組織（国立スインディー語振興協議会、National Council for Promotion of Sindhi Language）ができたのは1994年のことである。このことから、インドに移住したスインド人自身が、言語を振興させていこうとか、次世代に積極的に継承していこうという考えでまとまっていなかったと指摘できる。

言語は、国や機関が意図的に保護したり振興させるものではなく、形は変わるものの話し手たちの間で脈々と生き続けるものである。また、文字など外見にこだわって「古き良き時代」をしのぶものでもないということが、インド、パキスタンのスインディー語の状況を見るとよくわかる。確かに英語や、ヒンディー語、ウルドゥー語に押され、使用機会は限定的である。しかし、社会の流れに揉まれながらも脈々と生き続けており、今後もそれは続いていくと考える。

#### 4 ドマーキ語の言語状況について

##### —消滅の危機に瀕したパキスタンの印欧語— 吉岡 乾

本発表では、パキスタンの北部で話されている印欧語の1つ、ドマーキ語に関して、その言語状況を報告し、更に、記録言語学者の在りかたに関して、発表者の考えを提言した。

ドマーキ語は、インド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派インド語派中央グループに属する言語である。この系統に属する言語は、パキスタン北部地域の土着語としては唯一であり、周辺の言語とは系統が異なっている。ドマーキ語の話者は自称でドマ（単数はドム）という民族であり、ヨーロッパなどのロマ、アルメニアのロム、西アジアのドムらと同じ系統の、いわゆる「ジプシー」と呼ばれた人々であると考えられる。

ドマーキ語の話者は多く見積もって百人単位、パキスタン北部で「ドマ」と呼ばれている人たちの人口が少なくとも千人単位でいるのに比べ

て、随分と少ない。いわゆる、危機言語の一つである。発表者がパキスタン北部の各地を回って調べた限り、ドマーキ語を保持している話者は、ギルギット・バルティスタン州のフンザ谷モミナバード村と、ナゲル谷大ナゲル村ベディシャル地区にしか残っていない。

この2つの集落は、ブルシャスキー語（系統的孤立語）によって完全に包囲されている。ブルシャスキー語は話者数が10万人近くおり、フンザ・ナゲル県を中心とした地域で共通語として用いられている言語である。ドマ人が減っているわけではないのにドマーキ語話者が減っているのは、ドマーキ語から他の言語へと乗り換えるドマ人が多いからである。それは、ドマ人たちが実感する、ドマーキ語を話すことによるメリットが少ないことに起因しているだろう。

彼らは主に音楽に携わる職能集団でもあり、今でもパキスタン北部の広い地域で、祝いの席などの楽士として雇われることの多い、殊更に周囲の集団との接触が多い民族である。現状として、ドマーキ語話者の全員がブルシャスキー語も獲得している。加えて、客観化ができないものではあるが、発表者が見た限りドマ人は、周辺の多数派民族に、身分的に低く見られる傾向、或いは過去に低く見られていた可能性がある。周囲の多数派民族の意識がそうであるため、ドマ人たち自身、「ドマーキ語を使いたい」とは思えない環境に置かれていることに、疑いを差し挟む余地がない。

フィールド言語学・記録言語学の徒は言語を記録するのを目的とするべきである。言語維持や言語復興といった活動は、記録言語学者の義務と考えるべきではない。消滅の危機に瀕した言語は、早急に記録をしなければならぬ。と、消滅を食い止めなければならぬのかと言われれば、必ずしもその必要性はない。その言語がその環境で淘汰されるのならば、人為的に阻止すべきではなく、話者には言語を捨てる権利だってある。記録言語学者は、誰かが再びその言語を復興させたい、活性化させたいと思った時に提供できるよう、多くの記述・記録を残すことが求められるのである。

## 5 インド・ブナーにおける日本語学習と印日文化交流の歩み

### —オーラル・ヒストリーの記録を通じて—

## パルデシ・プラシャント

インドにおける日本語教育は1950年代にコルカタのビシュババラティ大学での日本語講座(選択科目)の開設に遡る。いち早く日本語と日本文化に関心を寄せたのはプネーであり、現在でも日本語学習者数が多い。果たしてプネーでだけが日本語学習と印日文化交流の種をまき、現在のような大きな木に成長させたのか、その過程はこれまで記録されていない。JASAS28で行った発表では2014年末以来行ったインタビュー調査を中心にプネーにおける日本語学習と印日文化交流の歩みを振り返り、今後の展望を述べた。以下その概要をまとめる。

プネーにおける日本語学習と印日文化交流の歩みは記録されていない。その歩みを記録し、後世に伝えるべく、発表者はオーラル・ヒストリーの記録を思い立ち、2014年から先人たちへのインタビューを開始した。最初に、日本文化紹介及び対日理解促進の功績により2008年に旭日双光章を受章した故Rameshchandra Raghunath Divekar氏(当時プネー印日協会会長)と2014年11月27日に対談した。ディベール会長との対談でプネーにおける日本語学習が1965年に始まり、今年(2015年)は50周年を迎えることが判明した。ディベール会長は電子工学を専門とし、1963年にヒンドゥー日立スカラシップで来日し、海外技術者研修協会(AOTS)主催の日本語研修プログラム(5週間)で正式に日本語を学び、日本での研修を終え、1964年にプネーに帰国した。帰国後1965年にPune Vidyarthi Grihaでボランティア活動として日本語講座を開始した。その後、氏はムンバイの日本総領事館の関係者と相談し、1971年に印日協会プネーを発足する運びとなった。青年海外協力隊の支援を受け、ムンバイ駐在の日本語教師がプネーに派遣されることになり、1972年に印日協会プネー主催の日本語講座が始まった。青年海外協力隊の3期生でプネーに日本語教師として派遣されたのはMichiko Tendulkar氏であり、70年代から現在にいたるまでプネーに滞在し、プネーの日本語教育に多大な貢献をしている。氏は印日協会プネー主催の日本語講座、その後プネー大学に開設された日本語講座で教鞭をとり、報告者を含め多くのインド人日本語学習者・教育者を育てた立役者である。1977年にプネー大学外国語学部で日本語講座が開講された。1991年の経済自由化政

策導入を受けて、日本企業のインド進出が著しく進み、それが日本語学習者の増加にも拍車をかけた（2015年現在、2万人強）。2011年にはブネーにあるティラク大学（Tilak Maharashtra Vidyapeeth）に修士課程が開設された。日本語教育・研究の質的な水準を向上させることが今後の課題である。そのためには、日本語とマラーティー語の対照研究やその知見を取り入れた二言語版の教科書、辞書、参考書などを作成する必要があると報告者は考える。その一環として、パルデシ・桐生・ダムレ・スクタンカルが『日本語-マラーティー語基本動詞辞典』を編纂し、2015年12月に出版した。対照研究やその知見を取り入れた二言語版の教科書を模索中である。（文責・萬宮健策）

## 註

- 1 この項は今村・パルデシ・クルカルニー・フック・李の発表内容を今村・パルデシが要約したものである。

## 参考文献

- 宮島達夫、1985、『「ドアをあけたが、あかなかった」—動詞の意味における〈結果性〉—』『計量国語学』、14-8、335-353頁。
- Prashant Pardeshi, Kazuyuki Kiryu, Hari Damle, Meena Ashizawa, 2015, 『日本語-マラーティー語基本動詞辞典』, Pune: Rajhans Prakashan.
- Turner, Ralph Lilley, 1966, A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages, London: Oxford University Press.

まみや けんさく ●東京外国語大学  
 いまむら やすなり ●国立国語研究所  
 プラシャント・パルデシ ●国立国語研究所